

「あしがき」にかえて - 外国語教育について

学部では「言語学」、大学院で「仏語・仏文学」を専攻した。学部で英語教師の資格を得ていたので、大学院時代、大学の近くの公立中学で短い期間だったが英語を教えたことがある。仏語を小学校から教える私立に移ってからは英語を教えたことはない。

日本では中等教育で英語以外の外国語を教える学校は非常に少ない。学が言語を選択できる中高は大都会には少しは存在するが、実際に英語以外を選択する生徒は決して多くはない。受験科目として英語しか受け付けない大学（特に理科系）がある。社会に出ても、外国語といえば英語という常識がまかり通っている。仏語を中学校で教え始めたころ、その学校で昔から用いられている日本製教科書を当時の文部省に、検定の対象にしてほしい、と持ち込んだ事がある。この申し出は「外国語教科書検定」の対象としては英語の教科書しか考えていなかった役人にやんわり断られた。

中国や韓国は若者に英語以外の選択肢をかなり提供している。日本では大学の教養課程の解体が話題になり始めた 90 年代から、大学の外国語教育をどうするかということが大いに議論された。言葉は知的なものというより体感的に人間の価値観を規定するものであるから、大学で始めるのは遅すぎるのである。ヨーロッパの多くの国では、外国語教育は主に中等教育の仕事であり、大学の任務ではない。

各言語は、形は異なるが同じモノを映す鏡のようなものでは決してない。異なる形式の言語が、それぞれ異なった価値観で世界を切り取っているのである。言語が違えば世界が違う。ホメーロス作品、プルーストの小説、クレオール文学の翻訳されたものはもはや原語の世界をそのまま移したものではない。

すべてを商品化し、記号化しようとする価値観の延長上に生じた現在の世界の混乱から、各国はいち早く抜け出そうとあしがきもがいている。このようにときに外国語として相変わらず英語だけを教え込むことで、日本の子どもたちを同じ隘路に追い込んではいくつかではないのか。人類に本来備わっている様々な可能性を伸ばし、多様な考え方の存在を彼らに知らせるため、古人の言葉、多くの他者の言語との接触は必要である。(09.04.25)